様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　１０日現在

機関番号：３４３０５
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１３６０３０５
研究課題名（和文）宮殿建築と宮殿儀式の比較研究

研究課題名（英文）COMPARATIVE STUDIES ON THE EAST ASIAN PALACES AND THE PALATIAL CEREMONIES

研究代表者
川本　重雄（KAWAMOTO SHIGEO）
京都女子大学・家政学部・学長
研究者番号：４０１７５２９５

研究成果の概要（和文）：
中国を中心とする東アジアの宮殿建築と宮殿儀式の特徴を明らかにするために、海外の研究協力者と共同研究などを行うことにより、その比較研究を実施した。研究期間の前半には、即位、政務、皇子誕生、葬祭、祖先崇拝、宗教儀礼を取り上げて、日中韓越四カ国の宮殿儀式の内容を研究協力者と共に調査し検討した。そして、最終年度には元日の朝賀と宴会を対象として四カ国の宮殿空間と儀式の比較研究を行い、唐代の宮殿、平安宮、朝鮮王朝の宮殿、ベトナムグェン王朝の宮殿及びそこで開かれた儀式の特徴を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
This research has been practiced by the four researchers who have studied the Chinese, Japanese, Korean and Vietnamese palace and their ceremonies. In this research term nine workshops had been held on the Palatial Ceremonies; enthronement, political activities, birth, funeral ceremonies, ancestor worships, religious activities and the New Year's Day ceremonies in the East Asian Palaces.
In this report we focus on the New Year's Day Audience and Banquet to clarify the different and common features among the palatial space for the ceremonies and the ceremonies in the four countries.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
２０１０年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
２０１１年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
年度			
年度			
総　計	13,400,000	4,020,000	17,420,000

研究分野：工学
科研費の分科・細目：建築学･建築史・意匠
キーワード：国際研究者交流、宮殿、儀式、唐、平安宮、朝鮮王朝、グェン王朝

１．研究開始当初の背景
王の住まいである宮殿は、王権の優越性を示すための種々の儀礼を行う場であると同時に､建築･建築空間としてその優越性が表出さ

れる場でもある。この研究では、宮殿の中で王権の優越性が表される場やそこで繰り広げられる儀式を比較研究することで、宮殿建築とりわけ日本古代の宮殿建築の特徴を明確にすることを目指そうと考えた。

一方、日本古代の宮殿建築や儀式は、唐をはじめとする中国王朝の宮殿建築や宮殿儀式の直接的な影響の下で形成される。そのことは、朝鮮半島やベトナムの王朝が造営した宮殿やそこで行われた宮殿儀式についても同様のことが指摘できる。従来から東アジアの宮殿及び宮殿儀式について中国からの影響が概念的に述べられてはいるが、その内容について具体的に検討するものはほとんどない。

こうした問題点を認識しながら、宮殿建築と宮殿儀式、とりわけ東アジアの事例について比較研究を行うこととした。

２．研究の目的

東アジアの木造建築文化圏の国々の宮殿建築、宮殿儀式がどのような特徴を持っているか、各国に共通する特徴、それぞれに固有の宮殿建築文化とは何かを明確にすることを目的とする。

そして、それを通して日本の宮殿建築とそこで行われた宮殿儀式の特徴を明確にする。

３．研究の方法

各地の宮殿建築の実地調査、宮殿儀式の具体的な事例を文献史料に基づいて解明する。その上で、東アジアの唐の時代の中国、平安時代の日本、世宗時代の朝鮮、ベトナムグェン王朝の事例を中心に宮殿儀式とそれが行われた宮殿空間の比較研究を、海外研究協力者と共に実施する。

４．研究成果

ここでは、日中韓越四箇国の正月の朝賀及び宴会を比較研究した成果を報告する。

４－０．はじめに

中国及び日本、韓国については、宮殿儀式時の場所の設定や儀式次第を書き記した儀式書がいくつも伝えられているのに対して、ベトナムグェン王朝時代の儀式書は存在していない。ただし、グェン王朝は 1802 年から 1945 年まで続いた王朝であるために、儀式の時の写真や儀式に列席した人たちが記した記録が伝えられている。そこで、日中韓三箇国については、儀式書の記述内容を比較することによって、また、ベトナムについてはその写真資料などを加えて比較することによって、正月の朝賀及び宴会が四箇国の間でどのように異なり、どの点が共通するのかを明確にしたい。

４－１．朝賀の空間

『大唐開元禮』によれば、皇帝が朝賀を受ける空間は大きく四つの空間からなる。皇帝が御す**太極殿**、皇太子及び参列した群臣の代表である上公が賀を奏上する**階上（殿上）**、皇太子及び群臣が整列する**殿庭**、参列者が朝賀の前に集合し待機する**門外**の四つである。この四つの空間によって朝賀空間が構成される点は、朝鮮王朝や日本古代の宮殿でも共通する。これに対してグェン王朝では、殿庭が三品以上が整列する上段と四品以下が整列する下段に分けられ、殿上に相当する空間がない。次に四つの空間の装束（鋪設・室礼）について､それぞれの特徴を述べることとする。

・正殿：『大唐開元禮』において、正殿である太極殿に設けられる席として記されるのは皇帝の席のみである。皇帝は西房より出で、御座に就き、朝賀終了後東房より入るので、太極殿には西房・東房があり、ここを経て入退場したことになる。

日本の大極殿、朝鮮の勤政殿は一つの大空間で、正殿の北側の建物に天皇・王の控える建物があり、正殿北面から入退場する。

ベトナムグェン王朝の太和殿には、殿内の空間を南北に分ける板壁が設けられている。この板壁には、中央と左右の三箇所に出入口が設けられており、皇帝は太和殿北面中央の戸から板壁の北側の空間に一旦入り、板壁の東側の扉から殿内に入り、御座に就き、儀式が終わった後、板壁西扉から出る。

なお、日本の大極殿では、殿内に皇后の座等が設けられている。

・殿上：唐では、麾（指図旗）が西階上に置かれる。朝鮮では香案が左右に置かれ、西階上に麾擧位を設ける。日本では、殿上に皇太子・内辨大臣の幄が設けられ、銅烏幢・日月及び四神の旗が殿上（龍尾道）南端に立てられる。このように、龍尾道南端に一列に旗を並べるのは日本だけで特徴である。奈良時代までの大極殿が回廊によって囲われていて、殿庭から大極殿が直接見えなかったことが影響しているのだろう。

なお、ベトナムフエの宮殿では殿庭に相当する空間はない。太和殿の前庭が二段に分かれているのは、殿庭が二段に分かれているのである。

・殿庭：唐の殿庭は横街によって南北に二分もしくは三分され、中央の南北の道によって東西に二分され、殿庭に樂懸が置かれる。そして、参列者が列立する時、三品以上は北面するが、四品以下は東西相対して立つ。これに対して、日本・朝鮮は殿庭に北面して品位の順に整列する。ベトナムでは、三品以上は上段に､四品以下は下段に北面して整列する。

・門外：唐では、集合・待機場所である門外位は東西朝堂の前に設けられる。皇太子は東朝堂の北に西向き、文官は東朝堂の前に西面して、武官は西朝堂の前に東面して立つ。

朝鮮では、王世子は勤政門外道東、文官二品以上は永濟橋北道東、文官三品以下は橋南

道東、宗親・武官二品以上は橋北道西、同三品以下は橋南道西にそれぞれの場所が設けられる。つまり、道と橋（流れ）により門外は区分されている。

日本では、皇太子の次は大極殿の西に建つ昭訓門外の北腋にあり、唐・朝鮮が南門の南に設ける点と異なる。官人五位以上は朝集堂床に集まった後、朝集堂前に整列し、六位以下は朱雀門東西仗舎前に集合、翔鸞棲鳳樓前から朝集堂前へ移動し、最終的には朝堂の前で整列して待機する。

ベトナムフエの宮殿では、殿庭を囲う回廊・門がない。殿庭の周辺、東西の堂周辺に参列者は集まった。

４－２．朝賀の次第

朝賀は、皇太子朝賀・群臣朝賀の順に行われる。『大唐開元禮』の記述では以下の通り進行する。

①四品以下及び皇太子殿庭の位に就く。
②皇帝出御。
③皇太子朝賀。皇太子は御前に進み賀を奏す。その後位に戻る。
④侍中が制を承け、殿庭に降り、宣制。
⑤皇太子出御
⑥三品以上入場就位。
⑦上公朝賀。上公、解剣席で剣を解き、階を昇り、御前に進み賀を称す。その後位に戻る。
⑧侍中が制を承け、殿庭に降り、宣制。群官舞踏万歳三唱。
⑨この間に、中書令諸方表を奏し、黄門侍郎瑞を奏す。
⑩諸州・諸藩貢物、請付所司。
⑪三品以上退場。
⑫侍中前奏稱「禮畢」。皇帝退場。
⑬その他の群官退場。

『大唐開元禮』	『世宗實錄』	『貞観儀式』
四品以下入場	三品以下入場	全員入場
皇帝出御	王出御	天皇出御
皇太子朝賀	王世子朝賀	皇太子朝賀
宣制（侍中）	宣教（傳教官）	宣制（侍従）
三品以上入場	二品以上入場	
上公朝賀	宣箋目	奏賀・奏瑞
奏表・奏瑞	群臣奏賀	
宣制（侍中）	宣教（傳教官）	宣制（奏賀者）
貢物請付所司	貢物請付所司	
三品以上退場		
皇帝退場	王退場	天皇退場
四品以下退場	全員退場	全員退場

表 1.唐・朝鮮・古代日本の朝賀の次第

『大唐開元礼』、『世宗実録』『貞観儀式』に記される元日朝賀の次第は上の表の通りである。

・群臣の入退場：唐と朝鮮では、上級官僚の入場を皇帝出御・皇太子朝賀終了後にするが、日本では皇太子も含め全員就位後、天皇が出御する。一方、退場の時は唐では上級官僚退出後に皇帝は退出するが、朝鮮・日本では王・天皇の退出後、全員が退場する。

・皇太子の奏賀：唐では皇太子は殿庭で再拝した後、殿上に昇り、皇帝の前に進んで賀を述べる。皇太子はその後殿庭に戻り、続いて侍中が皇帝の制を承け、殿庭に下りて、制を皇太子に述べる。

朝鮮では、殿庭道東の位に就く。代致詞官が西偏階より殿上に昇り、御座の前に進んで、王世子の賀を上奏する。その後代致詞官は殿庭に戻る。次に傳教官が御座の前に進んで、王の教を承け、階に臨んで、教を述べる。つまり、王世子は常に殿庭にあって、代致詞官・傳教官が殿上と殿庭の間を行き来し、王世子・王それぞれの言葉を伝える。

日本の古代の事例では、皇太子は大極殿中階より南榮に進んで、御座の前に跪いて、賀を述べる。皇太子が壇上（龍尾道より上）の位に復すと、侍従が御座の前に膝行して進み、詔を承ける。侍従は大極殿東階より降りて詔使の位において西面して宣制する。太子は拝舞、再拝した後幄座に還る。

・群臣の奏賀：唐では上公が解剣席において舄を脱ぎ、剣を解き、殿上に升り、御座の前で北面して跪き、賀を称える。その後、殿上を降り、解剣席の後ろにおいて跪き、剣を着け、殿庭横街南の位に復する。皇帝からの詔は侍従がこれを承けて殿上より降り、群官の東北に西面して立ち、宣命を述べる。

朝鮮では、代致詞官が西偏階を昇り、御座の前に進み、俯伏して跪く。通賛が「跪」と言い、宗親・群官跪く。代致詞官が賀を述べる。俯伏し起き、降りて位に復す。通賛が「俯伏興四拝興平身。」と言い、宗親群官俯伏興四拝興平身。

日本では、奏賀者・奏瑞者と呼ばれる参列者の代表が龍尾道東階より昇り、それぞれの行立位に就く。最初に奏賀者が版に就き、賀を奏し、位に戻り、殿庭の群官と一緒に再拝する。続いて奏瑞者が版に進み、瑞を奏した後位に復す。次に奏賀者が再度版に就いて、天皇の勅を受ける。奏賀者・奏瑞者そろって殿庭に降り、奏瑞者は殿庭の元の場所に戻り、奏賀者のみ殿庭北端の宣命の位に止まり、ここで天皇の制を述べる。

４－３．元日宴会の空間

唐及び朝鮮においては、元日宴会は朝賀と

同じ場所を用いて行われる。これに対して、日本の『貞観儀式』では、朝賀は大極殿で行われることになっているが、元日宴会は豊楽殿・豊楽院という大極殿の西側の区画で行われることになっており、ベトナムグェン朝の宮殿では、朝賀の行われる太和殿の北側に位置する勤政殿において宴会が行われる。つまり、日本とベトナムは朝賀空間と宴会空間が別に設けられる。

・**玉座**：唐・朝鮮では朝賀の座を宴会でも玉座として用いる。日本は豊楽殿に高御座を設ける。朝賀の時の大極殿の高御座は八角形の帳であるのに対し、豊楽殿は方形の斗帳を用いる。八角形が円を表現していることは明らかなので、方円の考え方が二つの玉座の違いに表れていることになる。

・**正殿内の座**：唐では、朝鮮・日本と異なり皇帝の座しか設けられていないと考えられる。

朝鮮では、二品以上の座を正殿内に設けている。王世子の座は、御座の東南、西向きに、王世孫・宗親二品以上の座はその後ろ少し南に位置する。文武二品以上の座は、御座の西南で、宗親二品以上の座と相向うように設けられている。

日本では、皇后・皇太子・参議以上の座が豊楽殿内に設けられる。皇后の座は、西第二間に南面で。皇太子座は、東第二間に西面。親王以下参議以上の座は、第三･四間、少し南に南北に二行で設ける。

・**殿上の座**：唐では、殿上に文官三品以上（御座の東南に西向）、介公鄾公武官三品以上（御座の西南、東向）朝集使他、三品以上、蕃客三等以上の座が設けられる。

朝鮮でも殿上（壇上）に座を設ける。宗親正三品以上は階上の東、六曹参議以下はその南。僉知中樞僉知敦寧位は殿上の西。宗親正從四品五品正六品は参議の後ろ、左侍臣從三品正四品は宗親の南、右侍臣從三品正四品は僉知中樞の後ろ、左侍臣從四品以下は南の中階の東、右侍臣從四品以下は南の中階の西。侍臣六品は南階の下の東西。壇の高さに応じた使い分けが記録の中にも明示されている。

日本の豊楽殿・豊楽院には殿上に相当する壇上の空間はない。

・**拝位**：唐では、拝位は全て殿庭に設けられ、拝の後解剣席で剣を解き、階を昇り、殿上に昇る。宴会の途中では座の後ろに立って再拝などの儀礼を行う。

朝鮮では、宴会時の拝位は殿上と殿庭に設けられる。王世子の拝位は殿階上當中に北向きで、王世孫の拝位は王世子の後ろ、宗親六品以上の拝位は殿階上王世孫の後ろ。文武二品以上も殿階上。文武三品以下は殿庭の東西に設けられる。

日本では、全ての拝位は殿庭に設けられる。

・**殿庭の座**：唐では、升殿できない者の座はその拝位に置かれる。

朝鮮では文武三品以下の不升殿者の座は、殿庭の東西。向き合う形で北上に設ける。

・**脇殿**：日本では顕陽・承歓堂内に次侍従（五位）以上の座が設けられるので、殿庭には座はない。

・**酒臺**：唐では皇帝用の壽尊、酒樽は殿上東序の端に、升殿者の酒尊は東西廂に、殿庭に座る群官の酒尊はその座の南にそれぞれ置かれる。

朝鮮では、王用の壽酒亭は殿内南近く、升殿者の酒卓は殿外の東西に、殿階上及び殿庭者酒卓は各品の前に置かれる。

日本では、参議以上の酒台は東廊二･三間に、顕陽・承歓堂の座に就く人用の酒台は北第五間柱の外に置かれる。

４－４．元日宴会の次第

『大唐開元礼』の記述では正月の宴会は以下の通り進行する。

①楽人・二舞が殿庭に入場し立つ。
②文武官等の座を設ける。
③酒臺を所定の位置に設置する。
④非昇殿者が殿庭の位に就く。
⑤皇帝が出御し、座に就く。
⑥昇殿者が入場し、殿庭の位に就く。
⑦昇殿者が殿上に昇り、それぞれの座の後ろに立つ。
⑧上公が皇帝に酒を進める。皇帝飲酒の後、参列者は着座する。
⑨尚食奉御が皇帝に酒を進める。それに先立って参列者は席の後ろに立ち、皇帝が酒を飲み終えた後着座する。
⑩群官、それぞれの座において酒を飲む。
⑪尚食奉御が皇帝に食を進める。それに先立って参列者は席の後ろに立ち、皇帝が食し終えると着座する。
⑫群官に飯をすすめる。
⑬もし皇帝より群官に酒を賜う時は、皇帝より「賜酒」の詔があり、その酒を飲む。）
⑭宴会は終わり、群官は起立し、殿庭の拝位に就き、再拝する。
⑮もし皇帝より「賜物」の詔があれば、侍中が宣制。
⑯昇殿者が退場する。
⑰侍中が「禮畢」と皇帝に伝え、皇帝は退場。

⑱その他の者が退場する。

『世宗實錄』	『貞観儀式』
三品以下入場就位	
王出御	天皇出御
	皇太子・内弁大臣出御
	暦奏
	氷様・腹赤奏
	親王以下五位以上入場、立庭中
王世子酒を王に進める	
王世子席の後ろに立つ	
宗親六品以上入場・就位	
王世孫酒を王に進める	
王世孫以下席の後ろに立つ	
文武二品以上入場・就位	
議政酒を王に進める	
百官席の後ろに立つ	
司饗提、王の饌案を進める	
王世子百官席に就く	
	謝酒の拝
	群官就座
	御饌供す・五位以上の饌を賜う
司饗提、副提、執事官饌卓を設ける	
司饗提、副提、執事官酒を振る舞う	升殿者・不升殿者に酒を賜う
酒行九徧	
楽舞	奏歌
司饗提、副提、執事官饌卓を撤す	
王世子百官殿庭拝位に就く	皇太子以下立庭中
	宣命宣制（宣命大夫）
	皇太子以下席に戻る
	皇太子以下群官に被物を賜う
殿下乗輿、還思政殿	
群官退出	群官退出
	女官に禄を給う。
	天皇退出

表 2．朝鮮と古代日本の元日宴会の次第

朝鮮王朝及び平安時代初期の日本の記録に記されている元日宴会の次第は上の表の通りである。朝賀の場合と異なり、唐、朝鮮、日本で次第はかなり異なっている。

・皇帝出御と退御：唐と朝鮮では非昇殿者、三品以下の中下級官吏が入場した後に、皇帝や王が玉座に出御するが、日本では天皇が高御座に就いた後、身分の高い者から順に豊楽院に入場する。

一方、退御の時唐では昇殿者が先ず退出し、次に皇帝、非昇殿者の順であったが、朝鮮では王が退御した後、群官がそろって退出する。日本では群官が退出した後に天皇は退く。

・暦奏：日本では群官が入場する前に暦奏、氷様奏、腹赤奏が行われる。暦奏は、朝鮮の場合冬至に観象監が冬至冊暦として実施している。

・進酒：唐と朝鮮では皇帝に酒や食事を進める儀礼が宴会の始まりに行われるが、日本ではそうした儀礼はない。

唐の場合、群官に酒が振る舞われるのに先立って上公（最上位の官僚）及び尚食奉御より皇帝に酒が進ぜられる。他方、朝鮮では王世子（皇太子）、王世孫、議政（官僚の代表）の順に王に酒を進める。

食饌は、唐では尚食奉御がこれを皇帝に進め、朝鮮では司饗提が王に進める。

日本では、入場した群官が謝座・謝酒の拝儀を殿庭で行った後、宴席に着き、饌及び酒が振る舞われる。

・宣命宣制：宴会が終わり殿庭に群官が整列して拝儀を行うとき、詔を述べる宣命宣制を行うことになっているのは、日本だけである。唐では賜酒、賜物がある時だけ、賜酒・賜物の詔が宣制されるし、朝鮮では宴会の席での宣命宣制（宣教）はない。

・禄：日本では、宴会の最後に参列者に禄が給付され、これを受け取って、群官は退出した。唐では、賜物が準備されることもあったが、朝鮮王朝の記録に禄に関する内容は記載されていない。

４－５．内裏正殿・紫宸殿における元日宴会

『貞観儀式』は元日宴会を行う場所を豊楽殿・豊楽院として、その装束や次第を記述しているが、六国史より実際に元日宴会が行われた場所を確認すると、豊楽殿で元日宴会が行われたのは、嵯峨天皇時代の弘仁 11 年～14 年の間だけである。そして、それ以外の期間については、内裏正殿（一時、東宮正殿の事例もある）が元日宴会の会場となるのが原則である。そこで、平安時代の後半に編纂された史料ではあるが、『江家次第』から内裏正殿である紫宸殿における元日宴会の空間や次第を確認することとしたい。

豊楽院における空間・装束と内裏における空間・装束との間の一番大きな違いは、豊楽院では脇殿である顕陽堂・承歓堂に群臣の座が設けられるが、内裏では群臣の座として校書殿・宜陽殿などの脇殿を利用しないことである。そして、正殿内に設けられる座は、豊楽殿の場合でも紫宸殿の場合でも同様なので、正殿に昇殿できない臣下の座が、殿庭に設けられた。つまり、内裏の南門である承明門の内側東西に設けられた幄舎に侍従、諸大夫の座とその供饌が置かれた。また、紫宸殿南面の階段の東に弁以下史生に至る太政官の官吏、西に殿上侍臣、蔵人所雑色らの座が、設けられた。この紫宸殿南階東西の座については饗膳に関する記述はない。

元日宴会の次第については、暦奏、氷様奏、腹赤奏が『江家次第』では確認できないが、それ以外の次第については概ね一致する。

一方、『内裏儀式』には豊楽院以前の元日宴会の状況が記されている。これによると、大極殿・八省院における朝賀の後、天皇が内裏に戻りそこで、宴会が開かれた。宴会の座席は、正殿殿上に参議以上の座、五位以上の座が殿庭に立てられた東西の幄舎の下に設けられた。つまり、平安時代の初期においても、内裏では『江家次第』の記述とほぼ同じ位置に宴会の時の座席が設けられていたことが分かる。ただ、殿庭に座が設けられる点では唐や朝鮮と共通するように見えるかもしれないが、日本の場合その席は拝賀を行うときの拝位とは全く別の幄舎内になっていて、この点において唐、朝鮮の事例とは全く異なる。

『内裏儀式』の次第には、暦奏が含まれる点は『江家次第』とことなるが、それ以外の点は各儀式書に記される次第は概ね共通する。

４－６．日本の古代宮殿の特質

唐・朝鮮の宮殿と比較して日本の古代宮殿の特質を考えると、次のような特徴を挙げることができる。

①朝賀を行う宮殿と、宴会を行う宮殿が分かれている。
②朝賀を行う宮殿が、正殿・殿上・殿庭・門外で構成される点は共通するが、殿上（龍尾道上）に皇太子と内辨大臣の幄舎を立てる点や殿上前面に旗を立てる点は日本固有のものである。
③宴会を行う宮殿は、さらに豊楽院と内裏に分かれる。
④宴会用の宮殿は、豊楽院・内裏とも殿上に相当する空間を持たない。
⑤参議以上の貴族が正殿の座に就く点は、豊楽院・内裏とも同じだが、非昇殿者の座を豊楽院では脇殿に設けるのに対し、内裏では殿庭の幄舎に設ける。

ここに挙げた特徴は、唐の宮殿や宮殿儀式が伝えられる以前の特徴を受け継いでいる、あるいは日本固有の宮殿建築分かの展開があった結果であると考えなければならない。奈良時代以前の日本の古代宮殿における儀式については既に述べたところであるので（川本重雄『日本の住まいの空間と儀式に関する歴史学的研究』科学研究費報告書、2004 年）、ここでは繰り返さないが、平城宮第１次大極殿院の南門脇に設けられた空間が、宴会時に内裏に設けられる承明門東西の幄舎と共通する可能性があること、龍尾道上に何本もの旗を立てたのは大極殿院が回廊で囲われた時代の名残を示している可能性がある点を述べておきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①川本重雄「古代宮殿における饗宴空間」（『家具道具室内史』2、pp.5-20、2011 年５月
②川本重雄「古代の屏風とその用法」（『家具道具室内史』2、pp.5-16、2010 年５月）

③川本重雄「天皇の座一高御座・椅子・大床子・平敷一」（『家具道具室内史』1、pp.52-66、2009 年５月）
〔学会発表〕（計１件）
①川本重雄「寝殿造と里内裏～宮殿儀式から見た寝殿造と里内裏の成立～」日本建築学会大会・都市史小委員会シンポジウム・2010 年９月 11 日・富山大学
〔図書〕（計７件）
①川本重雄『宮殿建築と宮殿儀式の比較研究』（科学研究費報告書、2013 年３月）
②川本重雄『東アジアの宮殿建築と儀式』（科学研究費シンポジウム報告書、2013 年３月）pp7-12,53-59,86-89,99-100。
③川本重雄『寝殿造と書院造の間』（科学研究費シンポジウム報告書、2013 年 1 月）pp.7-16,71-75。
④川本重雄『国宝の美 40・桃山時代の建築』（朝日新聞出版、2010 年６月）pp.36
⑤川本重雄『王朝文学と物語絵』（竹林舎、2010 年５月）「王朝絵画の空間表現」pp.36-59 を執筆。
⑥川本重雄『アジアの宮殿建築と儀式』（科学研究費報告書、2010 年３月）pp.2-20、180-202 を執筆。
⑦川本重雄『都市と城館の中世』（高志書院、2010 年４月）「行幸御殿と安土城本丸御殿」pp.105-130 を執筆。

６．研究組織
(1)研究代表者
川本重雄（Kawamoto Shigeo）
京都女子大学・家政学部・学長
Kyoto Women's University, President
研究者番号：40175295

(2)海外研究協力者
①福田　美穂（Fukuda Miho）
国立台湾師範大学助理教授
National Taiwan Normal University, Lecturer
②Phan ThanhaHai
フエ文化財保存センター所長
Hue Monuments Conservation Center, Director
③Cho Jaemo
国立慶北大学准教授
Kyonpook National University, Associate Professor